子どもの発達段階に即した社会認識の育成をめざす社会科学習

－　思考力，判断力，表現力を育てる学習活動の実践　－

1．社会科で願う豊かな学びの姿

最近テレビではクイズ番組が隆盛であり，断片的知識量を競っている。しかし，たとえ多くの知識・技能を習得したとしても，活用する場面がなければ，その知識・技能はなんら意味をもたない。一部の子どもが「社会科は覚えなくてはいけないことが多いけど，何のために覚えなくてはならないのかがわからない。」といった発言をするのは，知識・技能を活用することによって「役立った」と感じる経験が少ないことによると考えられる。

知識・技能の活用とは，必要な知識を取得，選択しながら，習得した知識，概念，技能をつかって思考し，判断し，表現することである。知識・技能を活用することによって，「授業や生活の中での疑問，課題を解決するのに役立った。」，「これまでの見方，考え方と違った新しい見方，考え方で社会をとらえるのに役立った。」といった経験を小学校３年生から中学校３年生までの７年間を通して，積み上げていくことが大切であると私たちは考えている。小学校３年生から継続して，このような経験をした子どもは，その後の学習でもその発達段階に応じ，それらの知識，概念のつながりを模索しながら，疑問，課題を解決したり社会をとらえようとしたりするであろう。その場合，授業で直接得た知識・技能のみならず，これまでの学びの結果，新たに得た知識・技能や概念，さらに社会生活の中で様々な体験や人との出会いや，本，新聞，テレビ，インターネットなどから自ら獲得した知識など，活用する知識・技能・概念も発達段階に応じて増えていく。つまり，習得した知識・技能を活用する学習活動を小中７年間を見通し，系統的に行うことが，自ら知識・技能を習得し，活用しようとする探究する姿につながっていく。このように「習得」「活用」「探究」がスパイラルにつながってこそ「豊かな学び」といえるのではないだろうか。小中一貫した取り組みを通して，主体的に探究し続ける「豊かな学びの姿」が子どもたちに見られることを私たちは願っている。

私たちの考える「豊かな学びの姿」（３年生の企業単元学習後の感想より）

・マーケッティングを行ったり，調べ学習をやって，起業にどれだけのお金がかかるか，消費者はどのような商品をどのような価格で欲しているかを肌で感じられた。（中略）この学習の影響で，新聞の株価を毎日チェックするようになったので，株についてもっと勉強して，いつか実際の株式を買ってみたいと感じた。

・株式や円高，円安，景気のことは，今までニュースや新聞を見ても何のことかよく分からなかったけど勉強した後だと分かるようになって，すごくおもしろくなりました。景気は今すごく大きな問題になっていますが，そのニュースを見ても，自分なりの考えをもてるようになってきました。

2．昨年度までの研究の経緯

昨年度，社会科部では，「豊かな学び」こそ，社会科の本質的な目標である「社会認識の育成」，さらには「公民的資質の育成」につながると考えるに至った。そして「豊かな学び」に迫るために，研究テーマを「子どもの発達段階に即した社会認識の育成をめざす社会科学習」と定め，次の３つの視点から，追究していくことにした。

①「習得」するべき知識・技能を明らかにする。
② 知識・技能を「活用」して思考力，判断力，表現力を育てる学習活動を設定する。
③「中核となる視点」を見つけ「探究」する学びにつながる単元を構想する。

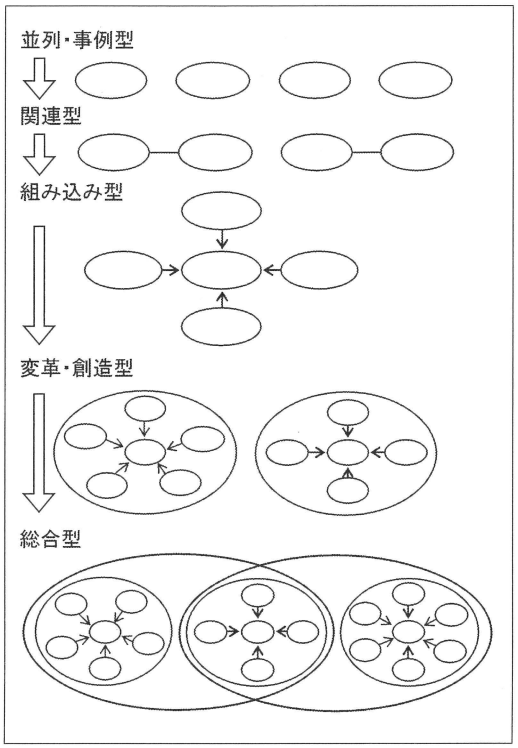
この３点のうち昨年度は，③の視点に重点を置いて単元構成の面から研究に取り組んだ。基盤となっ

たのは，島根大学教育学部の社会科教育担当教員との共同研究である。この研究は子どもの社会認識の発達仮説に基づいて「社会認識構造（社会科のわかり方）の発達モデル」を作成し，「この学齢までには，この段階まで子どもの社会認識を発達させよう」というめやすをもって授業実践を行い，それを検証するという方法で進めてきた。

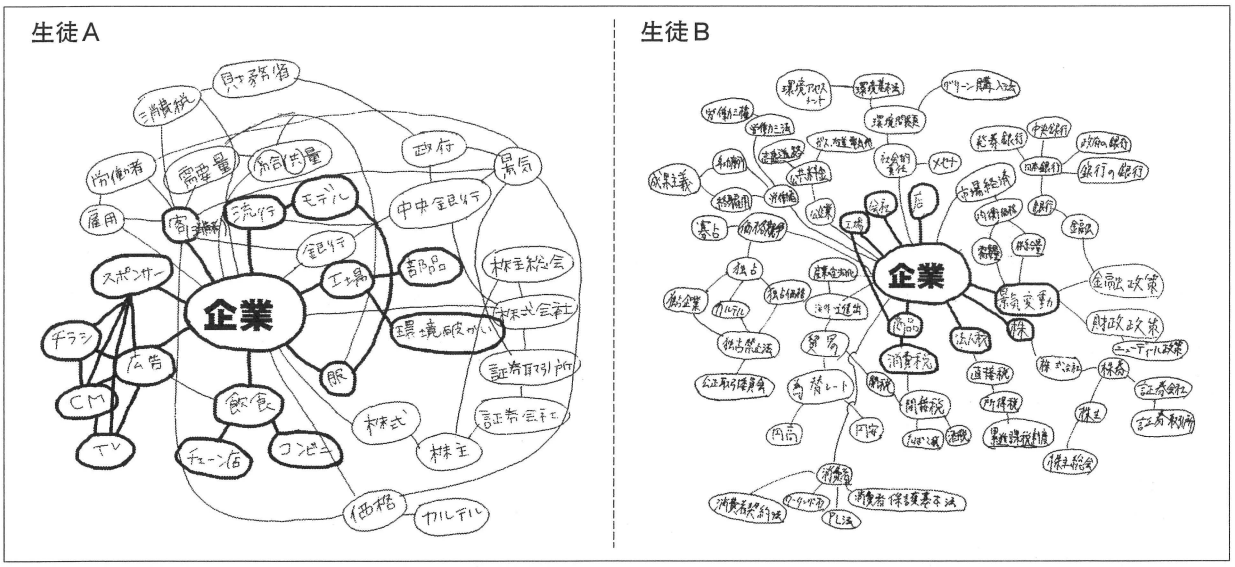
一昨年度までの授業実践の検証から，子どもたちの習得した知識（視点）が，ネットワーク化していくためにはその視点をつなぐ「中核となる視点」が重要であることがわかってきた。この「中核となる視点」を，教師がどうとらえているかによって，発問や単元の主題の設定も変わり，子どもたちの社会認識の育成に大きく関わってくる。そこで，私たちは授業実践を通して，「中核となる視点」に，子どもたちが様々な視点をどのようにつなげていくのかをとらえ，教師が考えている「中核となる視点」が，本当に子どもにとって「探究」する学びにつながるものであるか，ということを検証していくことにした。そこで昨年度は，この社会認識構造の発達モデルに沿った授業実践を小学校5年生地理，小学校6年生歴史，中学校1年生歴史，中学校3年生公民の各学年，各分野で行い，単元の学習の前後にイメージマップを描かせるという方法で検証を試みた。ここでは，中学校3年生でおこなった起業シミュレーションを教材とした企業経済についての学習について検証していきたい。

中学校3年生の単元「企業を通して経済を考えよう」では，中核となる視点を「松江に貢献する企業」ととらえ，総合型をめざして単元構成をおこなった。この実践では単元の授業前後のイメージマップから次のような成果と課題が見えてきた。（太線が授業前，細線が授業後）

社会認識構造の発達モデル



並列・事例型・・・得た知識（視点）が個別的，断片的で，相互に関連づけられていない段階。
関連型・・・視点相互が関連づけられるが，それぞれの視点のまとまりは依然並列的である段階。
組み込み型・・・中核となる視点に他の視点を関連づけ，意味づけていく段階。
変革・創造型・・・中核となる視点を，新しい見方，考え方でとらえ直していく段階。
総合型・・・さらに広い視野で抽象的な概念として総合的にとらえる段階。



企業について，Aの生徒は「経営者」側からしかとらえていなかった。しかしながら，この単元学習後，「消費者」「株主」側からの視点ももつようになり，さらには「金融」とのつながりや「政治」との

関係からも企業をとらえるようになった。この生徒の授業後の感想には，次のようにある。

> 企業は企業，消費者は消費者じゃなくて，企業も消費者も銀行も他にもいろんなものが密接に関係しているんだとわかりました。（中略）企業が売るものを，ただ何となく買うという受け身な感じじゃなくて，もっとどんな商品で環境にどんな影響があってなどということを，積極的に考えなくちゃいけないと思いました。公害問題などの問題を，企業に全部押しつけるのではなく，私たちも一緒に考えなくてはならないと思った。

Ｂの生徒は，当初は企業についてあまりイメージができなかった。この生徒は次のように感想を書いている。

> 企業が社会的責任を負うと知って驚きました。企業は利益を優先させるものだとばかり思っていたので意外でした。具体的には４つの責任があると気づきました。①環境に配慮し，商品の開発，容器，家電製品などのリサイクルに努める。②消費者の生活や健康に気を遣って，安全で質の良い商品を消費者に届けること。③働く人たちの雇用を守り，職場の環境を良くしたり労働条件を整えること。④地域や社会の発展に努めることです。①については，環境問題が盛んに議論されるようになったのは最近のことであり，企業の責任は社会的背景に伴って変化するものだと思いました。②については当たり前のことだと思いますが，実際にはできていない企業がたくさんあるので残念です。（後略）

中核となる視点に「貢献する」という視点を置いたことが，多面的・多角的に企業をとらえることにつながり，生徒Ｂの企業についての認識を広げたと考えられる。

以上のことから，今年度も引き続き「社会認識構造の発達モデル」に沿った単元構想をおこない，単元構成の面からも「豊かな学び」に迫っていきたい。

３．今年度の研究の視点

⑴ 附属学校園社会科部の考える思考力・判断力・表現力とは

今回の改訂では思考力，判断力，表現力について，その能力の育成が重視されている。これらの能力について新学習指導要領解説社会編では改訂の趣旨の中で，「（前略）社会事象に関心をもって多面的・多角的に考察し，公正に判断する能力と態度を養い，社会的な見方考え方を成長させることを一層重視する方向で改善を図る」「（前略）各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること，社会事象の意味，意義を解釈すること，事象の特色や事象間の関連を説明すること，自分の考えを論述することを一層重視する方向で改善を図る」と具体的に示されている。

さらに，知識・技能を活用して思考力，判断力，表現力を育てる学習活動の基盤をなすのは言語能力であるとして，すべての教科を貫く重要な改善の視点として言語能力の育成が重視されている。

このようなことから，私たちは今回の改訂で重視される思考力，判断力，表現力とその育成をめざす学習方法の視点を次のように考えるに至った。

①思考力

社会事象を多面的・多角的に考察する力，社会事象の意味，意義を解釈する力，事象の特色や事象間の関連をつかむ力。加えて，これらの力で得た知識・概念などをまとめる力。思考力育成の前提となるものは，各種の資料や体験，人とのかかわり合いから，習得した技能を活用し必要な情報を読み取ったり知識を獲得したりする力である。そして習得した知識を根拠として，社会事象の背景を推察し事象同士の因果関係や法則性を科学的にとらえさせていくことが大切であると考える。

②判断力

公正に判断する力，社会的な見方や考え方ができる力。公正に判断する力は，事実を科学的に判断することだけではなく，未来に向けての子どもたち自身が生き方を判断する力を指している。つまり，事実判断の上に立った価値判断ができるということである。この力は，子ども自身の経験や既得の知識によって大きく変わってくるため，公正な判断力を育成するためには，子どもたち個々の生活経験や知識によって偏った判断に陥らないようにしなくてはならない。違った価値感をもつ大人や友だちとのかか

わり合いや，教師が価値感をゆさぶる発問を授業に組みこんでいくことが大切になってくる。

子どもが一人で行う判断にとどまらず，以上のような過程を経ることによって社会的な見方や考え方ができる力が育成されると考える。

③表現力

思考・判断したことを他者に伝える力。これまでも社会科では様々な表現力の育成が求められてきたが，とくに今回の改訂で求められている言語能力を活用した表現には，レポート作成や論述があり，論述では自分の論を一方的に述べるのではなく対話が成り立つことが大切である。いずれにせよ，根拠をもって自分の言葉で他者にわかりやすく伝える力を育てることが必要であると考える。

(2) 思考力・判断力・表現力を育てる学習活動～技能の系統的な活用と，他者とのかかわり合いを通して

昨年度までおこなってきた社会認識構造の発達モデルを基盤とした単元構成研究では，「中核となる視点」をどうとらえ，その視点につなげるためにはどのような発問や単元の主題を設定すればよいかを中心として研究を行ってきた。もちろん「中核となる視点」につなげるためには，発問や単元の主題設定だけでなく，生徒の思考力，判断力，表現力を育てていくことが大切になってくる。そこで今年度はさらにミクロな部分である②の『知識・技能を「活用」して思考力，判断力，表現力を育てる学習活動を設定する。』という視点から社会認識の育成に迫ろうと考え，次のような仮説を立てた。

1 習得した知識・技能を「活用」する学習活動を，系統的，継続的におこなうことによって，思考力，判断力，表現力が育つであろう。(思考力，判断力，表現力を育てる学習活動が成立する前提条件として，系統的，継続的な知識・技能の習得がある。)

2 他者とのかかわり合いを大切にする学習活動を取り入れることによって，思考力，判断力，表現力が育つであろう。(思考力，判断力，表現力を育てる学習活動が成立するための有効な手だてとしてかかわり合いがある。)

②の視点は，①の『「習得」すべき知識・技能を明らかにする。』ことが前提条件となる。これまでも基盤となる社会認識構造の発達モデルに沿った単元構想では，「中核となる視点」を考えて単元構成をするとき発達段階に応じた習得するべき知識・技能について考察し，事前に洗い出しをおこなってきた。今後もこのような作業を継続し単元ごとに明らかにしていこうと思っているが，技能の系統的な習得については，小中一貫教育開始当初から必要性を感じ，小中の連携を考えながら取り組んできた。具体的には，地理学習における地球儀，世界地図，雨温図の読み取りの技能や歴史学習における視点を明確にして絵画資料を読み取る技能の育成である。

そこで，仮説1についてはこれまでの実践に加え，新学習指導要領解説の分析から，「小中一貫技能系統表」を作成し，これを単元配列表に位置づけることによって系統的な技能活用の実践を図ることにした。

次に，仮説2については前項で取り上げた思考力，判断力，表現力を育てる学習方法の中から，友だち，教師，社会の中の人たちとのかかわり合いを重視した学習活動を組みこんだ問題解決学習を実施していくこととした。思考力，判断力，表現力の育成に力を入れた単元には，次の4つの活動場面を設定した。

a 具体的な活動や体験の中から，問題を発見したり必要な情報を収集する学習活動。

b 他者とかかわり合いながら，発見した問題を整理し，共通の課題としてとらえる学習活動。

c 自分とは違った見方・考え方をもつ他者とのかかわり合いによって，これまでの見方・考え方をゆさぶる学習活動。

d 思考・判断したことを，根拠をもって自分の言葉で他者にわかりやすく伝えることにより，対話が成立する学習活動。

検証の方法については，引き続き単元の学習の前後にイメージマップを描かせるという方法と，かかわり合いを重視した学習活動後の生徒の記述によって検証していきたい。　　(文責　竹崎　葉子)